當万孔張繰分　東巻

ホ 2
642
3

玉緒繰分 弐巻

○もの結びハ細疏の右のだりに云。かくしてさまざまにわかつゆゑなり

△本ドぞのや何の結び・こその結び・と云ことハ、凡かげに其理り然ることに

て、その結びと云ハ云の截断して居ることなり、或ハなすことなどこと云

ふあまたの語ドモぞのや何よりかゝらざる時ハ辨云へ連く云故其語のこ

まじ居るぞ、或ハこそに掛らざる時ハ、ぞ或ハごなど受けざれこれ

躰ならぬ語をなさざるに似、さてぞなどを受ても猶其詞きるゝこと

治まることあれを、本にこそと云辞ありてそれに應る時もぞなどこそ

云て能もぞそこにて即ち截断して、或ハあれと云がその係りてぞなど

本截断の云ふと云ひをさするに同じになり云ふれハ即ちそれにぞと

二巻 初丁右

2 642 3

截きて止れるに同じ趣となる、但うるさけれど、初学の為に猶云む、然
玉緒一巻十丁に「み河ゝそよしとおもへど」と有如く、古文にもここには
掛りの云にて截断となれるが當忘なる其云をも、猶ぞどと云んは
次へ云なきをもおこ有ハ、又其格の有ことぞ、尓もバとてなくてぞ
れよりおして爰に云趣をバ勿誤りそよ、さて又彼移云へ連くこゝハ
「ぞ」ある「こそ」あるなども、ぞのや何に係りてハ、やがて截断にて然亦「こそ」かゝ
云ひ「こそ」るゝと云へる産の截断云と同意になる、たとへバ人の歩みゆくにて
未だ止るとハなきをも、後より帯などを引かゝる者有時ハ、それが為に
かゝらて行をも絶さバ、やがて其処に立留るが如し、詞の未だ止まらず
次へ移りぬべきも、ぞのや何・文にそれに引きそれにかゝりてハ、やがてそこ

にして止り居る、之を本末の結びと云ふ、何れも截断云と称へて治
まるなり、然にいちゆるぞを使の結びといへるハ、自然その詞おのれ
と治り止まれるなれバ、もとより之をきるゝ詞と云、己が友鏡にハそれを
易からん為に名目を設けて、彼将に然んとする・と云ひ、已に然ると
云ひ、用云へ連く・躰言へ連くなど、玉緒・八衢・小云るを、おのおの二字
づゝにて其を差別をるなれバ、きるゝ詞と云限りをバ截断云と云へる
なり、其截断に渉る連躰言も已然言も、皆本の辞ぞのや何こそより引かく
りの趣にて皆轉して截断云となるなり、凡ての云ゆる云語の截断
もさる処ハ、ての移人の己れとにまれ、他にひかれてにまれ、かにかくに
てと止る処にて足動かれなれるがやし、されバおのれと止り治り截断を

る語ハ、彼代より帯とくふをを待ぬなり、さるによりて之を仮りに徒の結びと云へるものなり、徒の結と云ふハ、うぶにきこゆる詞と云んが如し、然るにそと云ひをと云が如きハ、かろらかなる辞故に、かの程よりんとせる人の帯をとるやうなる力ハなく、只づゝに止る人のうしろ帯にやはらかに手をかくるが如し、是と六方同じ程なる力の辞に、ぞをとどで抔有、さるからに略図にハ此にをを補へり、是らの辞が本にありての末の結りハ人聊ひくとなけれども止り、又引かれても異さまに動きもせざるが如きにて最軽く、実ハそへの結びものの結びなど云べくもあらぬなれども、猶そのや何にかゝり、こそに引もて連躰・已然の截断を転ずることに類へたるに、此までものの結と云なりけれ

ぞ結びと云ことハ宗とハぞのや何、又こそにある詞等に付て云べきなり、其ものを且くそとに付ても其結と云ことを云るぞやなどの辞に准へて云ことなるを、故に今ゐ法にそと徒の結びぞと云ても末をはりてと伝へてと広く論したる者なり、但し斯云へハとて「志にもあられぬむぞ咲ける」等と有ハ誠に能云るがよく論したる者なり、但し斯云へハ
結る「いま」等と有ハ[illegible]「いろえうかれ花をさけり」「ふりし里にも咲きける」古歌
らぬ全く同じと通ハしてへらしさるハ本よりなり、花こそ咲けれ」といへらしそいとく言ふへ
かゝる不有など○必ずまがふべからず、凡ぞハ事にまれ物にまれあるが中より取り出る言
へ、知ハ彼に対して此を云趣、こそハ其ぞとかはれど其かかりて筋別たる意なるる大こち
れにて、猶細やかなる味ひのあるをうまく意得るべき事なり、されど又「等来れハぞ有
だにきく」古今ハ「等来れハこそ有とぞふきけ」と云言も聞え、或ハ「とう衣手知」と
互に同意れかいづれにもしてころんとえくる次類もま、あなりがにうくに兼くころ
えて休むべきをまぞあらぬや、
○ぞえの言のえ
△五月雨の歌にのこ多かしんより考へて、己ハ既く思ひしハ、さみだれと云ことを五月の水れ名とせるをの有まで、きゆるぎやよひの類ひ

なるかゝるふ、そを[え]とうけハ云へるものを云べき歟とも思しうじ、又に考るに、み一ハ氣のまハ限らぬなり、古今秋「お紫せぬさきちの山え。ふく風の音ちや秋を哭こゝらん」と有ハ、「こさちの山まえ」の忘と哭田ろなど猶有べけれバ、「尓えの忘のえ」と云一条行るハうべなり、但し「さここれ」を月名ふと云ハ、え捕条に「五月二ありし年云」と歎して、みり氣の抜加りぬる年良とふも山ふとくぎ「ほゝ忘まあ」ぞや」等もええられぞなは右ㇾ云へる如まぞあらん、

○[ぞ]○濁るぞ小。既ㇾ終るるをいふと。味然る状かりていふもの二つにりと云

△友鏡に將然言・已然言・と同なる八、此処の云さ故なとを漢字ふせるのこなり、將然とハ一隅ふよりていへるにて亦ハ未然云なる云べしと、活語指南初巻三丁ふ云へるをこべし、さてあゝある活用の語ゝなと先ッ

將然、後已然、中間に連用・連躰・其又古中ふ截断云有て、此即ち一言万語の吞り止るなるが、凡そ活用五ッにまろろく其最中なる截断云を、連用・連躰・の二つ志て前後よりハさみ、さて其三つをまろ將然・已然・の二つ志て初後ふお對をさる技、漢語ふ彼正々堂々と云らんやうに然へる妙用のこと、亦活指ふ云へるがやし、さて此未然云を定るぞの中、「てぞとなむ」と有こと、次下五丁をまも云ひ六巻四丁右至五丁左へ詳なり、されど其けぢめれ辨論なし、つらく考ふ、多ハなふぬ「ぬるぬれ」ねの辭ハ自然の詞ふつけ、「てつ」「つる」「つれ」てよの辭ハ使然の詞を定るうと思える、かくなからちゝでよをやえつゝ[てぬ]と「なちゝでやらやえ忘[なぬ]との別の如し、かくきバ古事記なる輾轉者を許伊麻呂毘氏婆とよむ

めるなどハ、奈婆とせんぞ宜しからんと思ふなり、其由ハ此巻の九丁浪りに云ん、さててそハ、これぞ乃
約りと云ハ指出の詞に云へる如く、云にもかゝらぬひゞきとなりててそハいづれも皆然云なり、已然云すゝハ有をなし、これぞハ已然云なるさだまりなり、然れバこの
趣きハ既に一巻廿七八丁の縁分にも云へる如く、確く定めハ云難し、万二十四二
「朝なぎにあがる鳥バりになりて之可」後撰伊勢海にあそぶあまと
も成りてしが」是ハ大方同趣の語勢なるが、てそにそ云てありを受
る、斯るも猶少からぬ、されど大凡ハ上に云へる別き有と意得べし、
○をぞ　こもハをとをぞを社云云
△実(ゲニ)さ様なり、さ様なるにつきてハ、もの処・ぞの処・こその処・やの処・そ、
各々其例出そも宜しかめれど、然(シカ)ながくハ物せんも准へ知らえ、
となる故に略せることぞなからん、但しをもにつきていを傍示しきに

一つなり、奥此巻十三に別に云べし、
○てぞ　こもハたらぬといふをまて云云
△てぞのぞハ、かさたなはまらの七つより「花さくば宿かさぞ己かも
ぞ、志なぞ志ぬとも「忘れひしおもかぞ「人のまぞ来も「やとりぞ
やとれと様に云へると全く同く、未ぞ然らざるを云ふぞなれバ、下
に然んましべしよけせて孫へめもの十一のてにをは有べき理りな
り、さて古哥どもを見るに、此十一の中にてんとましとが多く、はし
ハとに多き様に思はる、都て爰に挙る哥どもの中に、之に遠(タガ)へる
よと思せるゝあれバ、そのよし次に云べし、さて序に云諸にハあづか
らぬことながら爰に辨へおくべきこと有、往(ハヤ)くより假名大意抄など在「手折てぞ

そはあらねども也」など云へるひがことどもを、然とも弁へぬのことなれ、
近頃出たる古今集の註に「てむハたらむの意なるもあれども、またた」
れバの意なるも多し、たもの約りてなれバなりと云て、よき考へと初
てはしハせるやうに共も云へるハ、をかしきことなり、但し一つふたつハ然云る ともはしぬの例も
り、彼万十九巻古山吹乎屋外尓植氏波見其等爾念者不止恋己曽益禮」なぞを長
歌よりつゞけれバ、止事じとハオ四句よりつゞく、恋まさるなるべきゆへに、氏波ハたれバにこそと
ふと思ひて、なども、件りの説を
けてハげにと思ひとる徒もあらん、謂れなき様なれど、こハ能くにをはのあ
るやうをしらぬからなり、たらむの意と云へバ将然言、たもの約と
云へバ已然言なるを、てむと云ふ将然言に云詞ハ、甚已然言ハたゞに
つもむと云辞あり、かく云ずば甚つれむをてむと云と様もも云んか、それも用ゐがたきことぞ、抑此将然・已然ぞ
の細やかなる類ハ、友鏡又ハ略図義具くハ活語指南に図して云を

あるところども能く考て暁（サト）るべし、「梅が香を袖にうつしてとゞめてむ春ハ過とも形見ならまし」のてむを、たれむの約
と云る類ハ、殊にいみじき誤なり、此てむなどハ将然言とみむてハ有べからん、上にもいつる如
く、たれむの約りならバ未をましとハ有まじきなり、さりながらたらむを約めててむと云
とハ云らまじきなり、たらむ、たりたらむたりと用らくも一の辞、てつるつれと活くも一つ
辞なるを、ぞより同じきにハたらむ、似てハ有猿と人と似たるとも有とハ云べく同じことハ
云まじきがごとくなり、たらむと云とてむと云と似たるたれむとつれむと似たるとハ云
べし、今世の説にてむことハたらむとりぬ意と云へるハ、うしへ見をたらむなりと云やゝ近か
らむ、「いめ云」と注せるハ、漢文に何猶何と云風情にてひとへに語と云るにハ非る故に、云へべてあと
てとあひならぶを六巻の條件るの記」などゝも云へるにて、近来世上の準論とハ同からぬ様を可知

○然ながり云 云略しもとて [てむ]

△あらもハてむと云ながてたる意外に餘意有て、已（スデ）にも云へるがごとく
なり、但し余意を含めて云ながらも、てむ こハ限らず、あらむ とも又たゞむとも例あ
うへに、なむ てむも外かさたハまらなどをむと定る・そいかある将然言を
あるむに限るにもなく、已然言をうくるむにても余意を含めて云ひかつる例まゝなりけれ、初学たちも思ひあらざれ、

○こかよハひ君がハ千代不云く

△此てぞハ「思ひ出ニせよ。」(そもそもてぞをあらねど)と有本ニ依んよりハ「思ひ出ニせん。」と
有方に从へバ殊ニてぞの辞かかり易き様なり、さる本も並べ有てなり、
○わかまと「てぞ」本とをへごと川と思へたちやかに川えなげきにかけて立し頃
△此ハ「本どをへぞてあん」又ハへ「うそくまし」など有べきさまに思ゆる、
さもごくハてぞのぞけど未然を云ぞと云説とあり難きなり、是ニよ
りて思ふニ、此分のてぞハ、彼「なげきてぞ妹背の山の中ニおつる吉野の
川のよしや世の中」と云へる哥のてえと同ニみえて、てけるを(四段の活のかさた なまらのごとき)
将然云とハみるまじく、(四段の活のきさ ちひみての如き)連用言として、それ交たるなれ
此ハえ然く漏るまじき例のなりと云へきニハ非る欤、一首の趣き然見
てかなるニハいかゞぞや、是をバ彼或説ニ惑ひてたれぞなかりしと思ひ

おやまりと分も、
○みちの尓有といふなる名取川なきなとり「てぞ」くるしかりけり
△是も「くるしかりけり」とあれバ、「なき名取てぞ」のかゝる処覚束なき様
まて、「なきなとりたまぞ」と見れバよろしかくまでゝかゝる思はれて、
さハ彼てぞニハたらぬぞたれぞの二首とあて「詠歌の書を袖ニうつし」てぞ
めてぞ」なゞをもたれぞの意なりと云説も語まてる事とやうに思
ふ人も有んかなれど、猶志かニハいかにし、但又或ハ此「なきなとりてえく
るしかりけり」の意ニてハ、てえハさてむてゝ、をてのけるをバ、此けるハつね
のけるとハ異ニて、けんと云意なへニて、推量のけるなりと云べき様
ニも学ゆめり、即ち此書六三丁ニおしてかるける」とて、其一種の例を出し

てあり、然れども、其註に、「件の哥どもの例ハ、こゝをもてかしこをおしてかりの
あるところにおける」と有めく、「ぞかし」をおしてかりて「何と」と云に
對しての「こそ」と有の例一つ有てをなせ「ほのかにと彩瑞乃袖おかなるの郎」と、此格をとりて、「あかり」をおし
てまへ八重にある」と、彼哥をおしたる、鳶をあるさ哥乃いきおのことも、此順をわせてみよし
然るに今此「名取川の歌をとるに、さることもなけれど、其説も通らじ、
されど「例」を柱の例にたれバ、又てだをたもとだとみべきに似て、そ
ハ歌より出しかなしとも上に判ある如くなり、然らバいかにと云んに、
此歌の例ハ柱の例あり、てそハてだとハあらざ、是も彼「ながれてそ
妹背の山の中に落る」と云へるてそと同きてそなりとも云べき歟、
古今集に此歌の出たる前後とも、已に顕はるゝ意の歌なるを考ふべし、

○にほひ「てぞ」なぐさむやと我思ひしになごりしとてこそ意しらるれ
△是もいきある人ましなどのてそなきあり、されどこハ「なぐさむ
と云へるやりど向かへるやなるによりて、上に未然を云ずりど有て、其こ
より掛れる処にてぞと思ひされバ此初句なるハげにてぞなる「へし、かく
て此外ハこゝに出せる歌ども、「うき身がうきを」の歌ハ未になれ「なりまし」、さて
「こがよハひ」の八「思ひ出にせよ」に「わが恋を」の八「出ぬべし」「大そうに」のは
「あきらかにてもむべき」たぐひなど」の八「中かつ」と有を能考ふ屋
し、猶いまだ、未然を云ずりどのかゝる定り有てハ、てぞに限るにあ
らざれバ、歌ぞまても甚外かさたなえまらの七つ、又ハ一段活のきにひ
ひみいみの六つまても、中二段活のきちひみいてみ七つまても、又下二

段活のえけせてねへめえきゑの十まても、何きも将然云まて云へるを交てのぞりにしありせバ、そが末ハ、必ん まし べしよけせてねへめきの十一音きそ意ある処有と知べし、こハ序に云途あり、様せ（えや）あくいなど将然云を交へあるなハいつまでも将然を顕さん まし くハ希求の詞どもまで照応あるたり、それに変りある格もなきまハ行くねい、さたん先の定例と意得てよかりん、

△爰に序にいさん、なむとてむとハ、共に今より後をと云なれど上にも云へる如く、なハまぬぬるぬきと活く辞なるを、万葉集中あまりく此ぬにあつるまハ、去字をかりり、又てハつつるつきと活くなるを、このてまハあまりく而字を當たり、准へてそのつるつきも而の字の意バへを思ひて又も用ひもあるべく、（波並三十丁合せ考べし、）なハ去字の意なくへを忘れずて、そを用ひも又もあるべきことく思へ、それまつきそて又傍論旨ら

古事記傳十巻十一輾轉を許伊麻呂毘氏婆とよめる処のしく上に丁小云へる如くまそ、かしこふてハてむよりハなむの方こそ宜しかりめと思ふハあしきや、凡そなむとてむとの差別ハ古き歌文をよくみてこころとおるべし、語りハことけやそうしねど、よく眼に味ひ見れバ、自ら然そのうち紀宥とハ思ひえらるくものぞ、さりれどもそハめと細やかなる処まで、まてにぬるとつるとをハ古書どもの異本ども校されバ、此本と彼本とかさみに異りてきゆるなと時々係るなり、

○紫式部日記 たゞあらじとバかりたくくひなゆゑ云と

△此奇かの式部家集まてハ三の句「くひなゆゑ」と係る、その方宜しくやさしき格なり、（又序に云さん、此方ハ補夜の鶏よりけま泣くとせまさの戸にふたくき儀つぬると、人の式部まいひしに並へるなるを、此よこ付

六左　七丁右細　八右細

のあるを、上の条にいへるぬらつらのことを思ふべし、
日記にてハつらかる留りの、家集にハぬらと有なり、

○ましかぞ　あるハ下に云又ましといふ例之

△並に然るをいて、此例有のことなりしぞ、字数定れりともあらぬ文章にても此例格ハ同じとなりべく、竹取物語一廿「たまを捕へたらましかば」ハ又事もなく家ハかいせられなまし」と有如き、猶種々の書どもに多かり、

○こそ並殺のかぞと云と同じ格之

△こそ、こそハ並殺云「」と有りんを、甚ハ文字一つ脱たるなめり、

次の八丁初行三行十行
のと同しかるへきなり、

○ましかぞの外にも後於きぞ云と

△夏につきて出たる中に「なりせば」の世ハ、佐行変格活、又ぞの又ハ麻行一段活、称ぞの称ハ奈行下二段活、てぞのてハ多行下二段活にて、いづれも皆将然云なり、又「みそやむ云ていひしを」此ハぞもじ濁らざるにて、第交るしハ己去のにて、彼ぃき志　志らと活く詞の連躰云なり、さて又ましかぞハ、まくましと活く云の已然云なり、さればましかぞと全く同じさまにハ意うまじきをなり、中にもいひしを」と云ひさしたるハ、彼二巻一丁にあげる後於四の、「詞きぬるう」川瀬の霧たちぬらく本をち方人の袖の見ゆる え と上へ及る「ゆるを」と同格にて上へ及る処のなきハ、いちぬる言を八含めて云外にいひのこしたるにこそあれ、「見ゆるを」も、「しを」も、連躰云をもと交たつところハ之ぞ同例なる、さてせぞ見ぞ称ぞてぞハ皆将然云を交へる

なり、ほどぞめりける、この已に然るを云へるぞし、未だ然らざるてまさに然んとするを云へるぞとの差別をえべし、誠やましかば八已然云をを受けるぞあれど云る八、此詞のうへまでのことなり、されど此詞八りと其辞全く将然云なるゆゑに、ましかばと云までも猶行末のことを語るまぞある、活語指南に、書躰の眞行草に云へる趣考ふべし、誠や此処に問ひをてて言をぬくめ足」とけるハ「ぬくめたる」のたの脱けるなるらん、「言を」とあれどあり、

（ ）ませば　これハましせば結ばるまりしこ。云云

△ましせばの約りと云ハ宜からじ、此ハまくせばの省り云ならんと上野人守村の云おこせたるぞ優き活雑三編に詳にせり、山口栞上巻廿七に云しことも八謬なりき、但しまくも即ましし同云の連用の格なり、まし八截断と連躰とを兼ぬることらきなり、されバ語意めとにあれ、ましせばと云てぞ」と云るもふつに聞えぬ名也八せぬなめれど、解釈し

てられバ截断言連躰言よりせばと云つゞけらるべき格文になし、まく八未より用云へ連く云なる故せ。と云用云へ将あるものなり、斯てをせは彼佐行変格に、連用す 截断する 連躰すれ 已然せよ 希求 と用らく語の将然云なり、故にせばと云辞あそ受て、せばと云ひて、その未をましの或たべかりけるなどく 即玉緒此処にみえたる証歌どもの如、結べることなり、さて其せ。へつゞけるまくのくの省りてまし。とのみ云えることにて八、「いかまくほし」と云べきを「生かばほしき八命なりけり」とよみ、又「見まくほし」を「見まほし」、「聞かまくほし」を「きかばほし」と樣に云へる例いと多かることなり、かく解釈あそ後さらに思へバ、玉緒此処めと今云と異るに渉るが作者の心意なるまで、「こま」八まくせば結ばるまり」と原本まハ有しを、板下たくをしと読るく格ず

書きおさめたる上ハ非ある歟尤思ちるべきなり、活雑(七二)の条に合考　漢籍訓ニ欲(オモフ)聞(キカマク)矣
ど云る類多かるも原く本の語例有てにも、漢籍訓のことハ別ニ和読語路撤ニつゞかれ、
○たゞにましといはざるハ云云
△上ニ云へる如く、未然を云ぞの末ハましと云ての多かる、志よりその
理りなれど、然りとてましニ限るにあらねど、爰ニ引万十五の「かくばか
りこひんとかねて志ら「ませば」の末を「妹をば見ずぞあるべかりける」と
云へるハ、いはゆる「べし」と云詞の活きの「べかり」にて應したるなり、「ませば」の辞ハよに云
へる如く、将然云を受る普通の例の辞なるを然る辞の末ハまたべて、
ハ「まし」「べし」たゞしく結ぶ例なる事状玉緒三の五丁已下考て喫るべし、
○ぬ「」に「」の辞の縁ぞ
△已然言をぞと受ると、連躰云をぞと受るとなれバ、めしきの

けぢめ有べきハ定まる理りなれど、已然云をぞと受るが、やゝく連躰
をぞと受るよ宗通ふさまなる甚数例少からぬ詞づかひなり、万葉十
巻「我宿よ舎白露の置ニもいでゝし思へぞしとの志げく」是ハおも
ふは」なり、又同十七「嘗え今ハなからんと思ふ麻氏婆かそみ被ひき月ハ
べまつ」是ハ「経ぬらん」なり、又貫之集「から衣新くなる年なれば人
ハかくこそふりまさりけれ」是ハ「年なれば」なり、同書「山深きやどにし
待も見年毎ニ花の色ハ浅くぞありける」此ハ「あれバ」なり、又「みし人もこ
ぬやどなれど桜花色もかはらず今ぞちりける」此ハ「宿なるに」なり、新拾
集に「夜昼え志ぐく日毎ニなりゆけえうれし人えこそしれなりゆく」
こハ「なりゆくに」なり、近くハ古今集、「花ちぎる君のまにくとあられバ」

山ニハ春もなく雪ニのみ」とは「来るニ」なり、又同秋、「移ろはむよりうつろふされ
をれバ嵐」川の山下とよみ志かなくらん」なれ、「来る」なり入かられ
ぞ凡ての活語どもの已然言をぞと受るに、連体言をにと受る
と似通へる言の説多しといへんも可欲(ヨケン)、七巻十三の條分見合べし、

○[も]

△もニ亦の字の意なる有、まさハだにと云へるに大かた同じ意なへき
るなり、此外種々様あれど、まづ此二つを心きて意得べし、さて
「動かぬ言尓て結ぶを」とて引る歌の中ニても、新十七「花ありて云ても
ろおく[も]みよし野ぞ」のもハ、だにの意、其外の心有なるハ亦(モマタ)の意
のなりと定也、次々俗られのもと云へるを皆意つけて辨へるべし、万

紫十六 十「忍ぶ袖にふりつる雪[毛]流去而(ナガレニテ)いもが手本にいゆきふれぬか」、
もらハだにの意なることを殊にたしかなり、「ふれぬか」ハ「ふれよかし」の意なれバ、ぬもだにもといへし、七巻
二十丁 廿一丁 に、ぬかぬかとをあまた引るをみるべきそれ、願ふ意のぬかの上に
ハ、多く此だにの意のも有、されど一むきに必然りとハ云難し、万十六
十六「こゝろせこハちや[も]こ[ぬか]とまつらんを」又 十七丁 施頭歌「よわたる月ハ子[を]
世[ぬか]となどのもハ、うちつけにだになりとハ云ひがたし、されどそ
れハさ云ひめりて由けバ意ハ一つに落ぬめり、

△をもを重ぬる格」より「○んのこのを」のあるべく、今一つ、○を一つにて
言ハを二つある格」とか何とか標して、今一つ又此を加ふるもよろしかるべき
思ふ条なり、拾遺 十七 雑秋「水のおもに深く浅くもえゆるかな紫の色

やゝ渕瀬あるらん」ふかきあさきの心ハをしはかるべし、と云へる如き是なり、深くも浅くもとをもと二つおく意なるなり、

又万葉三「蟲爾鳥爾毛吾れハなりなん」と云へる毛も、虫ふも鳥ふもと二つ云べきを、一つのもにてきかせたるなり、されどこハ「浅く深くも」などとハまさりて異なり、さて又これと似たる勢にて、もハ二つ有て、それにて連る今一つの辞をハ二つ云ひて二つにきかせたるも有、其之集下に「もみぢ葉も花をもをもをれるらんをそ手向の山の神もまたらん」これハをもをもと二つ云へるてにをハ、

○んの字のこと

△千四のもゝ千五百のも、「えせんきゃうせん」とかくと全く同意にて、せを「と書るまても有んか、其外ハんを今ハかくも又んの形変たるなるとハ誰もおもへるとふて、即古き筆の跡是、彼をとるに、「とんを「とん」と書る類少からず、其のこ古くて九なき板下かきのわけるにて今彫り

まきとある蜻蛉日記ふもをんと書る処多かるなどより思ふにんと今かくを見とかきも落つらん由をも知べきふあらそや、君かづむ」の言も猶さならんか、或云火焚す」を「とんを」昔を「ぼん」とかうろんハともふきたへもち元なり、さ元を㋲㋰両音に用へるなりと云へり奈万之奈下巻に此あとハ具さに云るり、

○ことと かく云云

△此をハ玉霰十七丁ふ詳説あり、往き見べし、「とても世ふながらふべくかゝらぬ身のうりの果をいそぐ法なれ」と正行楠氏の詠れけんなど、おもれなれど、初句けふ賤し、

△序に云をん、ある書に、「よのなかゝ」と云ハ是ふ對して云となり、も亦字の意なり」と云へるを実にさることかと問来し人ありきされ答へたらくハ、「よのなかゝおもふところハ晴やらぞ云云」の哥などまそは、

ばにさいちんも空かるべけれど、統宣集五「夜のほどろかくれえさくる蚊き火よ急けろ人をよそへてぞさる」蚊き火のなきれハ空に対してとハ叶えば、但是ハ志ひていはど空悪さるに対して夜亦急さる」と云こそ それよ付てよそへに蚊きを詠るなりとも云べきかなれど萬葉集廿六 八月十五夜「よもすがら空をめさん天の原こよひの月を雲なかくしそ」かくる類 尚万葉ホもと夜ほどろ よるハほどろ よるもほどろなど云ひ覚也 これら拾考ふべき也と云しを肯れ、秋くあくゆる論め廣くハ活語雑話□編了

○ぞとかくてぞあると詠べる云こ右いづもと云云」など云之 風雅十九云こ

△ばにぞと云てかな又つくと云へるなどをなるべし、されバ俊成々集なるも「うれをも風ホおほせつるかな」とありしを「うれをぞ」と誤れるなるべく、菅家万葉の「かくるしぞ」も、古今集によりて加へるし「もの誤なることを暁りぬべし、されバ是等ハ今少し云ひさ為もゆる

べけれ、曽ゆだしろに書ろれバとて、それ也系に写語ならざしと云たゞ万葉などハすべて考へざるかるべし、

○古四名小気てをれるむかり「ぞ」云云

△爰のをれる」空よりかく有べきとなり、是につきて思ふに、遠陵ん小此所をおれる」と志て其説有がよろしぬと、活雑初編ユ丁よ云為るが如くなるを、鈴屋翁ハ志かさてげに、是ハ外く折れる」なること紙ゆきらめたる人なるかゞにかうをのかるよハ自らにうけるなめり、

○ぞと こもと内か くるぞ尓をを添さる之云云

△考るに、此ぞとのをハ加とのとの如く歎息の言あり、言少もなくたゞ添へるものといとかろくうる古今打聴などの説ハあらば

○玉のをくろう分

○卅ノ十五

と古今新釈に辯あり、佳しさて又今考るに、此ぞを爰にかなげ

なるは皆向かけて詞のきるゝなるを、此外に一つ、ぞといへるが、其

末に出る例の連躰云むすびのかゝりとなれるあり、万十八六ウ、いろ

にせるふせのうらぞとこくこく君がこせんと我をさそむる」同十

六十 たゞそのくらめの花ぞをもくかさの清き月よにこゝら散来る」是ら（梅花毛）

なり、此「たゞそのく」の哥と見合せるに、上の「さそむる」とさしめるか

も「君が。」といへるがゆゑの結びには得しまで、「さそむる」は於初句の「いろに」

より二句のぞとへかゝりて、其たゞそのくむぞ散来る」いろにせるう

らぞとさそむる」と初中後かゝりあふべきなり、さて此万十の哥も、本に誰

苑之梅花毛」と有れど、ぞハ

毛ゆゑの上に曾ゆゑの脱たるなるべしといへる説によりて出せり、されば八十八巻なる伊

可爾世流布勢能宇良曾毛許己太久爾吉民我彌世武等和禮乎等登牟流」とある

十八尤

曾毛にみ合せてなり、されば十巻なる毛を毳のあやまりにて、「梅花毛」と訓べき歟

と云説は用らぬなり、ついでにいへん、万十七右七行「我許曾者」とある本、飛鳥井雅親卿真蹟

のをみつと、加納諸平の語るに思へば、件の

梅花毛なども古本ども尚求むべしとぞ、

○ぞや

△斎宮女御集「いかにぞや」なのりそれかと、いかにも忘もくるさとやはる

乃えいをつけまし」、是らも同じ、此外に右の哥どもの如く、いづくいかなりし

いかになどいひてぞいへるぞやは、向かくると、はきこえたれど、只云云ぞといふを

居うるに、をを添へたるにこそと見ゆるなり、源氏帚木巻に「さる

にようをかゝきよぞとそさだめけむたるぞや」と云へるなどを考ふべし、

○一つのぞ云云例なきをとりやはりん。さだめがたくなん

△新古今の「うき人乃月はなにぞのゆゑに我と思ひながらとうちな

円

「ぐあつく」と云へる歌に「そハつゐの俗語に「なんぞの何ならん」といふと同じくて、いくそのそとハ「のと」より美なりと云べく、「くさぶ」などと云べくハあらずぞて、そハ又別に一の語と云べくハ非るか、又古今集に、「いくそハくさろうしとかたれたり」とある、是も幾許(イクバク)・若干(イクバク)を幾十許(イクソバク)と云へるものと見えハ、叶えるやうなり、さてハ後撰十六なる「みこし路いくそ」のよくに年をへぬ」と云へるより、万葉集の、「いくそ」らさるの千年経らん」と云へるまで六首の証歌なる、いくそハ、皆幾十のこゝろとさるべきにやあらん、

〇栄戸のあと見えバ、ろ志をうきよわされぬ人乃かたにのぞとふ。うつろをて志たし伝たれのを紙尺よつへ「てのぞをる」首ほうら

△此引出づる二首も、のぞハ従おしたかる心」にてハ有なり、「むのをよ云よう皆のぞきる」などハげにおしたかりて「ほやぶむ」とあるに、「にさくらかたれるハ、その「ほやぶむ」のなき所なり、こゝらの説々げまげによくいたれるとぞ覚ゆる、

◯序にえらび出ん、此のぞハ大方連用言を受るなり「こゝらこのぞ・「かりのゝりぞ・なとをを考ふべし、又辨言をもうく、「みくしのぞふ」るぞなりさて語辞(テニヲハ)のぞをもうく、「如何にのぞとふ」の如し、此外にをも文て「何をもて」といへるハ古くハをさく「ア」當らずて、近き世の人の歌に、誰がにか有らん、「何つへるよしあきくいをのぞてる」と有しを、何との書にそのいらにぞもおぼえて足し事なり、但し猶よく考ふへし

○新勅十七 万十 立てくらひあそぶ「あぞ」ふ云云こゝろハ云く常ありぞ云ふうなど說云
撰十七首云々云
△此「立てくらひ」の哥ハ素秋に出るにハ万葉のなれバ是ハ十七
五十 巻十五ニ にいでて云ふ云といへるなり、されバ爰にハまづ出
志てハ、新続拾十七首哉々志ぬむらんなぎくるべきを前にそへて今ハさあらぞか
きんり首ハくるしと本行に大書して、さて左の細註に「こゝろハ」でをとぞと
おのづからまりさるのこと古今集よりこなたにハさらしくへえぬ様
之万葉にハこゝろつきありて巻に出すをみべし」と構に云ぞいとど
ゆゑあるそのらんとてにハわしかる首へきなるしきや、

○志るとぞに心こゝろハ云云 却てといふこと云云

△爰に引る六首の中に、古一なる「き柳桜の哥なる志めでハ却て
の心なりとこみるぞよれ、その余志きよしハ今時に是り是となりな
んおぼる書、古今集新釋と云ふの 其一首こ の秋の歌 に似たるたる説をこうて
知べし、かくて爰に六首引る中、新十四の天の戸を云云うき人
志めまで の歌ハ、「却ての心をふくまずはなき也」とあれど、是ハ猶も云ふ
くめるやうにも思ひなるべし考ふべし、
○ぞや何なくしぶをハのぞやく猶きあれ云云
△のハ猶くてなも近きハ、友鏡にはものの方へ近つけて図せる
如し 彼の十三段の活き詞どもへつるところぞや何となどもの中間
にある詞なるを考へて知べし、かゝるをにてろとめてらん人もがなと
こてろせる友鏡の図あり、あれになるみるべし、

○芸のなそ云 云人[の]あるべく
△是ハ次次にさえも云へぞえかあき秘の露むかりあやなしやと
人[の]とへ」と倒せるとむとかまハ渉るべし人[の]あるべくにか
「へと上へるくるこゝろなるて上二巻廿の繰分 々氏巻卅六に云へるかのし べくを
の乃結ひとハ云へかんべ
○のそいさゝか異ある而之
△凡ての八 そのや何よりハ並ろらろにて はも徒に類ふにや 近し
友綾の区し撰 爰においても能考べし のの乃字をもにの方へよせて下なへついるへかゝるべうとのせり
○のの結びにてなかば て切るゝ哥
△一巻十六丁細にのの結び云云別本のの紙に出せり」と云へるハこての

なめれど爰に出せる哥ハ四首たに彼十六丁に引る「いなむのそよといふ人
[の]なき」と云へる哥より次くのの結びと引証せる哥等十六左答の[の]ちひ
て哀[しき]より卅五右さ佐保山の[の]おもひやら[ろく]近の数首の例証の如く はも徒の結びにもこその結にもあ
らぞ ぞや何に類へるのの結びの哥とたしかに証せられハせざるなり
に思たる 殊に拾玉のハ「夜の袖[の]ありしに」とあれハてハ上二十二左「の
[の]・[の]・[の]の哥ども出して「件の哥たいづま」を定まれる格なれハ
なづもしろり云「云」と云へる如く今も斷り来まなし所なり 抑のの結
また一首の中バにて截しる哥ハ実にまれなる歌 歌仙家集一の十九丁惟
しかも我を忘らん下むも[の]結ひもいへぞと「つる」日ころは」とあ
たるゆく 一その残りならぬのこたしまで 五七句の中バまてその語

のきるくハこれかもと何れの書どもに有、さて彼羽性素なる「ちはぬか月〔の〕ちやくもあらん」「久堅の天の川霧たちこもるへく」と云へる哥も、板本には依ての〔の〕の結びにてなかばにて切りて」と云ふべき思ひしてを宥しかど、然なるさかりけり、ちはぬとハ活かぬにて此あらんハ性のあらんにつゞく、一巻四十三、六巻十五丁のかりとけりもせぬことよ、さて「ころもろの〔の〕なさハぬかも〔たる〕」思ひ孫の蓑路にさくへやあるそふるらん」これなん正きこくの例なる、但し此哥の事、一巻廿二丁にハ〔ぞ〕の結び「たる」の例に出せり、其ところのとり分に審にせり、さて又件の「ー日ゝの」の折も、結びんをの〔の〕の結びにと云ひも云べし、

○古七 ちはやふる神〔の〕きりきん」続くかくらに云々

△あは「きりきん杖衝」と云ふの哥なれバ、杖といふ枕語にあしきれてハなくれ、神のきりきんつく」と続く意にて、今くきるくきん

とハあらぬか如くも思ちるれど家集一本、「神やきりきん」ともありんやに應ぜれバ必きるてなり、それに准へるに、爰の玉緒げに結無せしりのとぞ思ふさて此のの結まて半バにて裁るるも、一巻十六右 に已に其断りの宥如く、玉証すけに稀なとあり、其まれなるをこて出せる中に、拾玉のをまじへ引るハいぶかし、其故ハ一巻二十三左〔の〕の処に、「かをとめてとふ人あらば何や此茶何やしく豹〔の〕ちさめざり〔なる〕」と出せるに双ぶへきなれバ、あらバこそきるくも〔の〕〔なる〕と有を出すべきに、拾玉のハ〔の〕〔なる〕なれバ、こハ彼三條の大綱の例にかたかひて変格など云べし、乃チ上二十二左に、全集・新古・千六・なくの有の〔の〕〔なる〕の例を挙て、「いづも」を定まれる格にハづもと云ふと云へる

なれバ、爰に此拾玉の哥の、「袖[の]ありにけり」を出ししハ、是これ
又もうぐくと長く断り置べきを、ふと見すぐされさて後云ん、いハゆ
るのの結の一首のまらすまて截たるハ、上に出せる躬恒集に、見ゆる
る 但し鏤板の哥仙集まてハのの結の証とまハなし、たゞその結び「しる」のあれど、「衣手[の]ぬさハぬき「いでる」」しける
が如きハげに少き例なり、
○のゝじおかくまうあまる哥 三つそつ子あれバ出さぬ」古 二今をかゝと云ん
△写本あれるようを挙となりバ、つ子に人の覚えたるまて、「同し
[の]山鳥[の]尾[の]しだり尾[の]」を出すも可ならん、但しこハいひそじのの 二ツ泊くの加ラなりふち
えるの小将の云」も「春のうきうりのなよの日の云」もこれハ 此うもいひくしのゝなりぶるらしに共二そを挙たるまや、
○風かよふ寐覚[の]袖[の]花[の]かにかをるまくら[の]春[の]夜[の]夢

△此袖の」乃のハ、げにかの意なり、但しかの意ののハ、必用言へかゝるなり、
されバ爰なるも、「の花」と、花へかゝれるまハあらぬぞ、句をへだてて、「袖のか
をるまくら」と云処へ掛れるなりと知べし、かの意のハいづれても用言へ
連くと知べき、但し「梅が香」「梅の香」、「萩の花」「萩が花」と、のとがとの互にいへるハ、がハ又別なり、今いふハ雅言ハの、それを俗言にはがといへるをいふなり、
○のと留まる哥 古十五 吹まよふ云云
△是ハすべて上へかへりて其きる処ハ、かの弐とあるのかの格にも忍し
うど、よく考えハさるやうにもあらぬぞ、古十八「今更に何生ひ出らん」竹
の子の「うきふし志けきよとハおもハぬか」や、此哥ハ中の五文字にてのと
截たるとぞ覚しき、さて其ののじよりまたハかへりて、「らん」と云へる
処まで截るなるべし、されバ此哥ハ、のと中にて云とぢむる例にもひ

き、又のとまれるが上へ反りたるハ、必かなと云へるのことなりと
ハ云ふまじきためしにも引出つべからず、さてかなと云へかへしの此一首
の中まできるくがぬくなるハ多かるべし、古二、志るしある此孫をもなく
かな「雲の」ほとりのこちるむすゝなく「に」の類なり、さて又かなといへ
でのの歩りの的なき例ハ、実方集、ねをたよいえまきめのつぶくといへ
やゆかん「思ふこゝろの」風雅集にも、思ふてふことハかくすぞ安くしられ「十」
ごもりぞりし人のあまれ「の」又形恆集一本に、ねとせらにきあん事
、そかさうしめ「いきてかひなくきぬ思ふ身の」枚本ハえ、写一本のなりきこて ところハ上へかへりての事、か、
きバかかなへかくるまハ限らざるなり、いづれをもまねびてよりん、
○用の詞より受くるの

△めとハ用言にても、のと受るハ、必志も粋云に志てのうへのことなり、
そハすと何れも連用言「きしちにひみいておへ又えけせて添へめえま忍、」「一段と中二段とるの用言」「下二段活語」
さてハ志た、まこむきじ「クユキシクシレシキ有」「将」「木」の二十七りに在をりて皆粋云にいひあ
志くるうへなれバ、用語受くるのと云べくハ非るなり、「ゆかん」「の」いさ
よひ・わきもれじ「の」け来・「なる人なし」「の」宿、此粋云のやうにいひなれハをへて組境ガ二段なへ活語の、式れ
に・あさまに などいひ、彼ガ一段なる詞とるなれバ、「うし・なれハうしのこいひ」式しうれ
むなとのこいふ定り、そのすしハ、にみ玉緒七巻廿丁に、やりじの又「一つの格として引りるおどもに」式
まあやにくの「 」まさ「あまもとろくめ」まさ「ありがふのよ」や まさ「そそ形の多の」まる「個めに」の
まる「そうみの霧や などええるこうて鳴けし、されどあハ赤ハあり」と云ひなせるともあ
り、活語指南初巻六丁「そえん」「の」心「忘いぞ志るぞの」の など云へるも、皆かの八
に赤せるが如し、
衢上巻十丁に、○活詞を躰言よいへる云云、古事記傳十七巻四丁に、活く辞を
そのまゝにて躰言に云云、渡てとりよ用云を甚まゝにて該る処をさし

て解云にを返でといひ云云と有是なり上にいへる廿四文字いづれの用云を云へるも同例なり、螢の、潤の、蓬生なとの類、稀々此例ヿ異なる辨衣もあるハ別ヿ云ふべし、「添ての、あさけの声ものふきえ」も「ちりのまがひヿ家路忘れて」隔なきおもひのまゝにするもこん」などをすべてき志ちにみいでみ ハこの例有 阿行のいよくいさ也行のいよのこ行り、えけせて添へめえも志 阿行のえも也行のえも、この例有、志 く志き」志く志志きと 流く両の形状云の志、の、有り、めく語、まで志 不字ヿ當れる、の廿四字を、のと交へてにその語めく用云なるが多かるぞかし、猶七巻十六紙のおきのまがひたると云へるをさぐるところ考へ合はべし、さて又こくなる引証の中、「こんやあじや」の・まこじ今ハ」の」ゆくりましかバ」の・あもしハ打まかせて用の語とも云雖きにあくびや、一むきに辞語ともえべからざれど、打まかせて用の語と云ハ、かようくに就くその語ヿ

て、八衛又友鏡底延影につどへる語どもを云べくおもへる、七巻十六をこ武かせ こがきのまがひ」などを六つ出せれど六つとも古今集ヿ「ちりのまがひ」と有るなどく全くはく、これを古風の郭と別ヿて出すべくハあらぬことなり、
㊀此あたりへ〇下知の詞を受るの」と志て一条を出すべきを、さて其下知の云と世ヿいひ来るハ、略図にいはゆる希求言なり、あの希求云と志る世るくだりく、異宝をみつてかくもようりのと云試らるべし、但しさる語例のあるをふと思ひハ出かされど、大鏡二「大蔵すことも、ささぎの時らての使ひまされて少ねまでありる」あれもこつべし、征伐せよの使と也、此類ひ猶考ふべし、
◯のめくとりふこれの
△此ハ文集にも有、古くハ出雲神壽詞ヿ、白鵠乃生御調能玩物止倭

文能大御心毛云「云」この初なる二つの乃能ハ、怪の云ひそこしののなるを、
倭文能ののハ、それとハ異にて、のぬくの意ののなり、此類中昔の假
名冊子にもあり、

〇一つ松の

千土 大きさ松恋しさる人すきてあきてよの信ぞ「の」とや君おもふらん、

好忠集 人妻とこゞ「の」とぬる川せよにハあれてし 袖を流されまさかれり、

△変に付る二首の歌なる「の」ハ、同き中にて、又二つにわけて示したき
ながいよくまえ易からん、其意ハ、千載集のハ「よのつぞの意とや」と
のりの下へ意と云ことを入てえべく、好忠集のハ「己がのと」と云へ
るかりをを、やがて妻と云語に通ひてこふべきなり、伊勢集に 枕木の侍なる

作にたつむなぬくと「作の葉にちりかゝらなん梅の花雪の中「の」をとると見
りふ歌に」とかりて、
るべく」差らも同じ、いと古き処にてハ、仏足石歌に、「くさそしハつゞの「の」も
あれどもまらひとの今の薬し来かりるまめたしかそりり」と見えたるな
ど猶ありぬべし、又此の「の」をハいへるに、その句を互にしてあやなせるも
とも有、栄花物語月宴に、古今集廿巻え書かせてのへさせ給うて世
にめでたくせさせ給ふたく今まで廿余年なり、古への今の古き新き
歌えもとゝのへさせ給て世にめでたうせさせ給ふ」、古の歌今の歌と云意、又古き歌新き歌と云
ところなるをも、ついでに考ふべし、これもあまき例なるとなり、
〇よの信ぞのとや」など云へると思ふにハ行るれど、少しかたれるやうに
も思ふる八、俗云には殊に多し、書籍のおくに、その持ぬしの名を志

る志て、誰某之と之字かゝるを近古まで多し、是もまれにちゝの
「くもりしハつ狭のもあまど」「よのなかのとや君おもふらん」などくはし
きこえたるなり、されどおもしかられる歌にも思はれぬにハいかゞぞ、さてかく云
のと同しきふて、がと云へるハ俗云にハ殊に多し、古しの詞づかひにも、
彼古今集左の註に、をりく擬本の人まろがなり」などいへる類ひに
つべし、志かがと云へるハ、古哥にハのといへるよりハ其数少きかと思ふる、
其少き故なかし、哥によめる例を一ついはゞ、万七 卅四「みしまえの玉江
の薦(コモ)をしめしよりおれの[が]とぞおもふいまだかられど」と有るなど彼の書
籍のおくに誰某之と書く之と同きなり、彼好去集なる「己がのの如く云へるも俗云にたがへり考へ有べし、
㊀此わかりへ「今一つ、○一つ然の」と志て、七巻 十六丁右 に○己が尓あふの」と云

へるを出してよめん、さるハ其の、たゞ古風部しかぎるべくもあらぬを
え、郎らしこ 七巻 十六丁 に「貫之集にも」と云ひ、「古今八にも」と云ひて、「秋萩
のことに立出て云」「白波のことにや」「妻のことにしてかるも」バをきり
なるめく、古今集の此哥にも此こゝろののあるによりてなり、猪爾
後の哥どもにも有べし、古今八なるハ、「秋萩の立出てをかしなむとことに咲ぬれりひとりひやてたらん」と云意なるを、隔句にいへるも
いとされハ、のハの如ののなり、されどなほ尓「あしひきの山田をうゑていなづま
堂の」と云ひつべきハ、万葉の小合考て見るべし、
のことに秋にハあきんとぞれもり」貫之 など、
○抛の‖ 新十三 いせ物語 云云 たのまぬ[ものを]こひつゝぞふる
△是ハ旨(ニガ)らと云に近し、此例文章にハいよく多かり、枕冊子 春曙本一「冬
かしきものゝ、ひがおほくめしられるなどもなかりバいみしかるべき

幸とこそあらくおぼしえられぬべし」など、

○のや

△万八九廿五月之花橘手為君」を仙覚本に、サツキノヤとよめるは僻へ有とあるべし、其をバさ「月の花橘」と四字句に訓こまむハなかくよしかるまじ、さて此のやハ、やの語ホ出して有べきめのかと思ふ由有、四ノ廿二と六より分合せ考べし、

○万葉に「妹がかなしさ」などいへるハ躰の詞乃下なれどが」と受るさ

△猶云ながらがと受るハなほ「君が貸ち己が若しち」などハぎこゝのかしこさ「おの若しさ」とハいはで、すべて君己母妻妹のたぐひハがとうけ、「よはのあはさ」「わがのそら」とやうに、非情のてゝ非情

の物ハ、のとのこうけてがとハ交らぬまゝやとをふ人ありつれど、然局りてもうけられず、「人の」行くち「親の」行くさとハ云べく、それを「人がおやが」とハ云がごくぞ思ゆるゝ、さてこの「妹がかなしさ」などをハ、万葉に」とあれバこそて、たゞ古風辞と云條にのこれくべき詞づかひなりとハ云まじきなり、

△○不知似るの」とやうにして今一条物まぐべく思ゆるゝのあり、古今集に、「志がの山こえに女のおほくあへりけるに、伊勢物語八段ある奇に「逢ても人のこゝちぬなりけり、塗籠本になしぬこハ人の」とあるなり、是ら考ふべきなり、紫式部集ホ「好なりやこハち有のいつかとていつゝの書の行へるハ法も」と有など、え漏家集にも、斜ちに「今ノ人不ゑて支ここまあひてぇ」と問て、奇「君とあまし人のあふ時は云」と行るかれどての

え校本まで
もぞなし、

○かな結ぶのか

△かなハかしこなしと定まれるなれバ、かく云ひてハいかにぞや覚ゆ、さて、
このかなのしかしとかしのことハ活雑三編に詳説せり、

○切るゝや

△きるゝやハすべて截断言をうくる定りなり、此やと全く意も同じくして、連躰言或ハ躰語をうくる時ハ、此やをうへてかと云定りなり、見ゆや、見ゆるかいつりや、をいへるが、と云へる如き例知ぬべし、躰語をうくるこ
花の例あれのたぐひなり、さて用言と用言との中にハさまる時ハ、連用言をうくること
やもかも其つゞけざまハ同じくて、かハ古くきこえ、やハやゝ後めきてきこゆ也、一概にも然しもあれど、まづ考へ分るゝなり、たとへハ「見えやせんとかめぬ、「咲きやちるらん」の類の如し、このこと此巻十二ものゝかゝりとけ合考、さて爰に切るゝ「やの例とさて引る歌の中に、古十四「まこともつる麻ぞなくわろきをとな
べしおのがなむ此のむとさしば「や」より、「むすぼれ名のことりハきく

これや」と云へるまでの四首、さて新古今十五、「おもひいりや」みのゝ
を山のひとつ松契りしことはいつも忘れず」など中にてきれたるを五首
出したるは、実に切るゝやなりと打任せて云ふべかれど、後拾十一なる「ふし
柴木はさそながらこそ折にはなほりはのものぞ布もみだれはじど、や」、同十六、「さ
へとしもおもひたぬ八重の山さびしさ秋ゆるをといたづきをうたらんど、や」、新
古十一、「難波がたみじかき芦のふしのまもあはでこの世をすぐしてよ
とや」と有、此三首なるやは、一首のはてにあれば、先にて一首の詞を截
ちきりたるやなれど、「ゆるせや・きみしばや・など云へるとは同からで、「ゆるするや・「きぬゝ
や・と続けて、連躰云を受け、或は「ゆえやさする・「きしぞやおもふ・などゝ、
連用云
ぞやは、連用云截断云をうくることばなり、さて「きこゆは、ゆとのこといへば截断云、
きてるは連用云、「きこゆるは連躰云と、先これのくはしきことはあとぞなり

をも受るやにて、なほつゞくやとこそみえられ、即て考るに、此三首
こやと云ひもちてたる処に、云外の意ありて、こは此玉緒五ニ右に、およそ
ととぢむる格と志て出せる例にて、これも一種別に標志て○や
ととぢむる格と志て挙ぐらんぞよろしかるべき、「難波がた」の哥に
て云はゞ、「すぐしてよとや・つらくはめてあきよ」と続たる余情こもれり、彼
こそととぢめたる哥のさまとも、から同じ趣なり、又此前後に引証せ
る九首のやは、たゞ問かくるのことに志て、受る処も必只きるゝ語より、或は
ぞや・きこゆや・いかにぞ君か袖はくちぬや・きてねや・いづや・見でたや・
や・など云へり、然云ねど云外の意なく、爰にて意も云もきるゝなれ
ば、「むかしおもひいでとか・そのかみにてとか・かくしてよとか」と有べきなり、凡
て

連躰を受るやうなり、截断を受るやあり、連用を受
るや加〻やうあるてくは略図を左右中と按じて暁了せよ、
○後廿かけてぞ下マが身にちゝくと思ひき〔や〕あん年ま（の）花をえじとハ
り訛なくハ変て出を牙のなきなくし
△此才二句のとハ後撰今本めくの訛まハ非る手、
で、ごとハいふふぞや也
也と云ふ及ふよどきなり、
○件のゐととのやえハ二つの格まで、初学の筆此ゐのがくく云云
△げに変なる論へまてよく也也、されど猶云ハで、人のちくろに云云ハ
ゐうれぬハなぜぢやい、木のふ鳴音を云云ハちくへぬハなぜぢやい、思ハ
ん方に云云ハちくるぬハなぜぢやい、たそうれに云云ふハあるぬもあぜ
ぢやぞ、道ちくぐて云云ハやまぬハなぜぢやぞ、とやうに訳し入まこそバ、い
よいよ快くやまうるべきやうなり、古今春なる思くまどバ云云ハさうぞ

あしぬハなぜあるぞと志てみべきなど、猶少からしだ、
○後於十九 マ子すしきぬ人の中ふは忘きぬをまつん人乃中にまつ〔やえ〕
△上此口尖二下りろ分ふ云へる如く、やとうとの大分け定り、や八きころく云を受、か八
連く云をうく、やえとかえとのおもきも全く同じ、然ふ変に引き寄の
まつ。やえハ、いさゝか紛ハしくて有、さるハまづ待つのつハきるとともに
くとの二の活用をかぬるなれバ、まつらえとも、まつやえだ云べきなり、
然るを前文のそてあくまで、こくハ截断言まて用へるもの、変ハ連躰云ふ
て用へるものと云をハおのづからふも志らるべかれど、をりくハ見へる節
ちにハ知まじがくき有、今此後於十九の、まつやえなどのまつハ、截断云の
方まてつかへるものと云てし、やえと云へるまて知べきなり、忍し連躰言

の方にて「まつ」と云へるならば、かえとうくべきなり、彼（此四巻廿九右「まふ」に引る古四の分）
ハあふ「かえ」の如し、抑きこゆると連ツヅクとを兼たる（四段の活きと　くさてつふむ　いへる詞ども）
るハ、多くハ「あふ」かえとやうにうたるにて、「あふ」やえと云へる類ひえ
多かるを、其に引れて件の「まつ」やえを疑ふ徒もやあらんとてかく
まで云ゐなり、

○ももべるゝえハんのえらつりける辞にて。えやハんやえの云々。云云

△げに然ることなり、此に付て思ふにかきくけと活く語にむかへて
られバ、ん（ん八即むなり）ハ、きくの二つにあたり、めハけに当る、「かく」と云云にていへ、かきハ連用云「か」ハ
連躰截断の二を兼ることバ、「かけ」ハ已然云なるを、このん、えハ、んハ連用連躰截断の
三つを兼ぬることバ、えハ已然云なり、和語説略図なる縦横の通局、東行の及不をて知
べし、然にその「めく」と云を交て、「めく」や云と云ハ、語のとぢめにいえや

る截多くやもあれバ、何それの語へつゞきていひゆるぞのや何のやと
あるをはなれと、其きるゝや、又つゞくやにてハ語のとぢめに、「あけ」やと
云をハ千に一も絶てなきことなり、「あけや」と云ひてきれたるハ、必下知に（あけと云ひ、それに歎息のやをそへて）
云へるなり、又つゞくやにてけりけうけるらんハ、この「あけれや」と
云云にて、けりの省きたるときのことなり、おもひまがふべからず、是に倒意そ按ずて
れバ、んやとのみいひて、えやとハ必云まじき理りなれど、いかなれバ
かく然んめにおいてハ、んやと云と、えやと云と、全く其意同じくあること
との有らへに、んやと有べき処をバ、えやと云へるが殊に多きぞかし、
然れども「こゝろを人にたづねさん。やえ」と云へるなどを、「たづねさ
めやえ」とハいひうりしても云がるなれば、文章に、「いえぺや」といへるを
を、「いはえ。や」とハ決キハめて云べからねなど、そのことわりハいかなれ

故とこそあれなど、古くよりおのづから云ひきたまる定りあるがごとくなるハ、あやしきわざとや云べからん、古今集序の終りなる、「こひざらめかも」などもこひざらんかものこゝろときこゆれど、ゑかもと有なり、さて此ゑんやの類ひ、此外にハもや、と云ともあり、次に云べし、活語指南に略図の因示と云へるに付てゑせることを考べし、めをべきの言と云説も非なり、

〇古十九 妻されたる云々花の名をも「もや云々」と云しもやハこゝろを切るゝ辞にて下のとぢめハやまかゝりし

△此もやハあもやとなれやに限まり、成の字にあてゝおもふるを、なもやと云格のことハなし、たもやと云へるもあれど、それハてあもやなれバめく別なるにあらざさてこの有也の二つハ、もハ連用截断の二をうくる、るハ連躰云、もハ已然

言とこゝろえたる語なり、都て切るゝやハ、必しも截断云をのミ受る定りなく、いとせる「ゆくや。何てんや。」と云ふ例なるにのぞめれバ、「ありや。なりや。」とのミいふべく、一かしよりさいへるも少からぬことある、おもえるれど、是ハさいかなるまゝ、「あもや。なれや。」と云へるを多きなり、されハ次上のゑやと此もやと、その云ひさま同例と云べし、さて又こゝに引証せるもやハ、こなたかくるやうれところ、此先たく二十のひら裏より廿一の包みれらくうけ引るおどものもやハ、歎息のもやとこゝろえれてハあれど今論むる格のことハ全く同しとなり、但しその中にハめとよりたゞもやまで、必ずやの言にハ非るなり、そこに云べし、

〇右のもやを皆。云云。やりしをたにかへて見もバんりゆきそし

△げによくさとせる訓へなり、但し志か何る中ニ「ゑがらみに川てちらせる布なる「まや」よ紙へてえれどとる人もなき、「何まにろとあれいくよみ宗なる「まや」をとゝきん人のなつまもせぬ」此一首などハ、やをそだにあてこゝろうる処まかなりハなりれど、志かしたる时ハ、をハりの「人もなき」ハ「人のなき」と省べしといえまほしく、「をとゝきん人のなつまもせぬ」のせぬハ「人の乃のみかゝもるなりと云べきくら地を、是らハ別なるをふも何らねど、かくまでも云ふハ、たゞ初学のゝあにさるみじくてふをそのこゝろえとなるべしと思び、又詞の玉緒をらんふ、おふにこそぐさび今少しこゝろとゞめてさるべき、云ぶきともなりなんと思へバぞかし、但し上まいく「何など」いへる下ハ普通ハ「か」と云てやとハをさくいまぬ例なるを忘れてハなゝまぬそ、

◎やぞこゝなるをのついでにいえん、「阿弥陀佛と十ぺん称へてまさろまん、ぬき睡りもまたりもやぞせん」和語灯録五 二十八丁出、とある歌のぞえ、その写誤などまや、考ふべし、

○新古今集 涼しさやおいぬる影を見るゐづ乃鳴き声よおふきこゆなりしん「やぞ」

△てにをはのことまハ関係ぬなれど、この序に云、此歌ハ一本に、たいのくかけをうつるか郭鳴き云」と省、頭ニ「子の月ものつかさ紙え玉ちうでくにつたまの人ニ」ふ是も一本のなり、板本乃もの、らん、と有よりうるに、此歌之此一本のかさよくきこゆるまや、辞ふつゞるに多名をうけたる例え、古今の「祝ひつる」など猶あり、

○志ゝ川のゐ流のいとえまかしくれどみだりに人をよせでゐを「や」

△是等の例ハ一ッ別に○をやと標してさる歌どもをバ引証した

くはかしきをなり、かゝる文よさくに、「しカルヲ況ヤ人ニ於テヲヤ」なぞ
云へるハ即歎をやうの漢文訓のをハ別に語路撤に云へもど今ふしことの
ついでまなん、
○もや云々七の毫古風調にきをて
△歎中、後於三のを引て、「ぞりあきぬ月ぶにあもや」と云へるとへ
り次々の三首ハ、「ぞりもと聚ふ云に。歎息のやを添ふる云」と河る
如く、のとより「あもやの意なしざるハ、これハ彼「夢たえぬとあけ。
や学一とせま二度とだま来べき春こは」と云へるけやの類例なるを、
後撰十三なる、「世中はうれりのあもや人云ふどにとかくなもきこ
えぶらし」と云へるより、いせ物語の、「秋乃夜も春日わすゝゝめ

〇ゐのなくり分
〇丹ノ卅二

成有いせ物語字本
のなもや うすゝにあやちくまさうんと有を引る迄乃八首のさゝに乃
例。」と云詞まて云もど「なく。」やと云べく、さそハ「なけ。やと云へるとハ、いく
く哭なれバ、「なく。や」と云べき処まハ「なけ。や」とハ又まくいたはるあと
なるに、有也の二ッに限りてハ、甚「あり。や」と云べき処「あり。や」と云べき処
をこそも、あもや「あもや」ハいへるハあやしきことなれ。上の件まむかるんやと云べき理りなるをかや
とも云るとみし数あり。歎ことと上まもいへるを又かくらぶしまゝ云ハいふそ初学の徒まこ
くえさせんとて、ぞさそ勢語の「ものなれや」真字本ま「成者」とあらようなれバ、その事
のもやも、彦句の「ちへまうちるらん」まかへまものとこそ、これれハ上ま十七右まへ「みなさめゝへ
引てさうぶせる布な「れや」よきをへて見れとそる人もあき」なと五首引る条まて並べく、
即ちや「かを如にかへて見まバ」とありし証共云べく一ひとつハ号まうれども上まいく「例なぞ
いふ疑なきまようこをハ呂麦へのゝ挙うるりのありぶくんを留めて考へ見るし、
△●雑のや云々此処へ、彼三巻廿八なる○のや云々尓しき「のや」など
そく花と云々の条ハ移し来さらんぞようしうるべき、甚故ハ、かの

のやのやハ軽くそへたるまでの事ぞ要まてハあるによりて、のれ
部に出せるもことわりなれど、志かかろく云へるやのかさをまそ、
やの終へと思えるハ、さるやうどの乃下に限らぬことたゞええたれ
ばなり、斯く云ふハ、於遠十一「我こそやみぬ人こふるやまひもまたあ
ふごなければやむくすりなし」と有るこそやハ「やまひもまたにかく
まへるハ、たゞこそようなるを、其こそに軽くやりどをそへたるも
のときこえ、又猶や人・なぞや・など云へる類も、皆誰と云ひなぞと
云へるにやを軽く添へたる例ときこゆれバなり、されバ「かろく添へるや
など云ひて、のや・なぞや・こそや云ふ類をやの一の例と挙なん方、きこ
えやすきまはいかゞや、

○一つのや 古今序 なにはづに咲くや この花と云へるたぐひ猶いとおほし
△こハ用言より躰言へ連くはひざまハかみてあやなきふで、即ち
吹くも 焼くも 塩などなれバ、仏足石哥に「いかなるや人にいませか
いはの上を土とふみなし跡遺けるらん」とあるなども此類まで「い
かなる人」と云ふまでぞおもはるゝ、さて新三、「おのがつまあひつくなく
[や] 又月やこの神奈備の山本とくぎき」、玉六「何となき末の松山
の音をあれなかぞむ [や] かぶり人そ住りぬる」、「ときのやを上なると同じ
ことながらいさゝかひざまかハまり」と有ハ、つらく此二首をこるふ
意ハ上なると同じとハ云ふまじく、彼此四首の初「動かぬ云まで詰
ぶや」と云へるつゞに入べきならんと思へる、さるハ「かぞむ [や] かぶり」

又「なく[や]云々なとくぎを」しかとあるまで、彼の「うちいづるなみ[や]
表のちる花など全く同じことゝ見えバなり、猶考ふべし、
○ねこつの間ふささむや云々
△む露るも妹ら※おどろかせる、またこれよしと云べしげふ意得べき
ことなり、但し愛子も即云て省かく、やハ古くも稀にハ有ることて、詞にハ
彼の大鏡に「高やはちなどを」と云へるなどハさしもみえたるならず
※、和語灯録三の廿五にいへる大胡実秀への御文に、「ねがはしも思ひ給はせ
さしん无智の人やさとりあらん女人などのえ具せぬ云々念仏の外の礼
拝や読誦や讃嘆供養なんどをぞ云云こゝろ味ふべし
○すべてかやうにやを似たる辞にてやと有ハし云々みだりにそつるひ

かくもし。
△万葉二巻三三明日香川明日谷一云左倍将見等念八方一云やも念香毛一云香かも吾王御名
忘世奴一云御名所忘 妹八方を一にハ香もとせるにれバ、かもとやものたがひ
にせらるゝいと古くよりも有し例なりとハ云べけれど、必これそれと
さかれるぞげふいと多かる、但しかとやとの用ひ分ちハあれども、それ
が結びハ異ならぞ又このやかハ躰言或ひハ連用言又連躰言にうけ
ながら、詞のきれぬ処にいるやかなりかし云ハ、さよらふけぬる・へ
ぬとらいもん・とハ躰言を受くるからにて、是ハ彼の「さよやふけぬる・
へぬとや・と云に通ふなり、然るに截断言を受て截るゝ時も、へふけぬや
と云て「又ぬら・へぬら・と格にハいはれぞ、又連躰言を受てきるゝ時

ハ「定めるか」とハ云へど「定めるや」とハ決めていはれざるなり、あのやと
かときこえやうに分きて有ハ、其やうにて、詞のきられて問かくる格の意
なるやうなりと知べし、連躰云をうくるも其やうにて詞のきるゝ小派
るハ、「落るや花の」とも「落るか花の」共互ひに通はせいはるゝなり、され
どもやと云へバ拙くなる処あり、又かと云てハおぼつかなかるべきこゆる有、
それハ実によく心を用ゐるべきなり、さて又已然云をうけて、それ
をうくる時のも、その意だくまでなくきそのをりのも、やういつまでも
もいはるゝなり、右に引る万二の念八方・念香毛・の如し、彼「心ざし深く
そめてしをりけれか」一九「をりけれぞか」九云へく、それを「をりけれや」九
「をりけれバや」九云べきたぐひ、意をとゞめて考へらるべし、動かぬ詞

を受てのやうハ、右に云ふ如く、「さよう定めるか」「今か咲らん」など「今こそ
云ひ哉」と云ふ皆動かぬ詞なるをいちじるく「きぬとかいはん」など
のとも（活指小具に云へる如く）躰云と云中に入へきなるをまよ、是を「今やりらん
花月の詞「花とやこらん白雲の」「よやくらき夜やまど」へる などに
あはせみべし、然れども甚奇々にようて、必かと云てよきと必や
と云が巧なるとのけぢめあるをハ、かくもちるまじきてぞかし、
○古今山科禅おとえの山乃きすぐ不人の去くべくまがちひ 続かも
△是ハ古二十とけれど、十三巻、「さゝのそふおく初霜の」と云へる次
に出るり、廿巻まで八墨滅の奇に出て、「月ー奇旨りおとその漱の」
と有即ち此玉緒此巻十四丸 小、古墨滅と挙たり、さて そこにハ「おひめ

や。を」と有、今爰に引るハ「おひ気ゟを。」とあれど、いづれも古今集にハ十三巻に出たるも二十巻のおく墨滅に入たるもともに「おひめやを。」とのミある本有て、それよりんと思ふハ心がこゝろえ不や、

〇かふ

△此がふ がみハ、こゝに引る歌「くる。まゝ がふ などまてこれハ、連歌に云ふくる辞なるを、「見る。がふ まがふ。がふ のる。ふ。ハ きれもでき も両用の詞あり、又ハ截断云を受る辞なり其おもハる、そは七巻卅三ふ引る「まてしをおもふ云 云かくるつぐ。がみ「秋田かる云く霜もおきぬ。「かふ」などこそ知るべきを、又そこに引る「と姫る がみ などこそこれバ、猶連社云を受るにて古くよりのをとなりけりされバこのがふ がみハ連く詞にも截る詞にも附著する辞なり

と思ひ定むべきなり、巻をバ古今已後ハつゞく詞不のミつけて云ふ定まるよく思ふべきにハ何らじ、さるつゞきの詞らにをさく見え志らかハぬにこそ有れ、その方なる「声のうる。がふ ことに倣ひて今も用ひたまバよそてなくてもうら有べき、猶雑話四編ふ、

◬何の下ふおくか。「かへ」の在処のこころえなどいふもよく辨へ在べきとなり、二巻十三丁のくりるけ不云へることをも考ふべきなり、

◬動くぬ云まて詠む何。」の処ふ方りて思ひ出れバ、「秋をうちみ西まうるく月を見て いく かつりか。は南无阿弥陀佛」こハ拾玉五ふ見え也俊成卿のなり、

〇切るゝ何

△此類ひまてなぞやし、やかド そなりて切またるも有、源順集ぶち

後しまつ四代木にいとゆをそのたえてよらぬハなぞや」とふう

○なにせんに

△此詞ハ、諺訳されハ二にわかる、一つハナニヽニ ナンノタメ、二つに引る後撰、なにせんにへのみる糸をおりひきん」に述(ツヾ)きて、きんの絃び

へ掛まるなど是なり、今一つハナニ、セウゾ、二つに引る古今なる「わかまで絲かゝ人も家々なにせんに」と截するこれなり、万葉五ハ

「白がねもこがねもたまもなにせんに」まされる宝子にしかめやと」ニヽ

有類、ならべてきるく何せんにハ皆是なり

○なにしに

△之と次条なる○なにしと意かよふほどきこゆ、又六帖の「なに

し菓」を、後拾遺ハなにし、又朝忠集なる「なにしおはゞ袖乃ぬるらん」を、一本にハ、何にかハと有よりこれバ、甚なにも亦同意也、拾遺の「あふさかとなにしおもひけん」などもなにかハともなにしかとも、なにとも、くへらるゝやうなれバ、この三つ全く同意と定むべきさま也、されど古今なる、なにしか人をおもひそめけん」な

どく、栄花浦々別是ハしくそうぞきたるものく当たりてまたく迷ふりに係ることハなにしはろ」まで〔これハ何為ぞまろ〕なとくハ、全(モハ)ら言たへ

異なるべし、又浦々の是に、きでんの女房あまた称くなにしま

こつらんなどいひこそ」と有などハ、「あまたなにしおはひそめ

けん」のに同意たさるのまで、なにし命の云「云」なにし菓」なにお

りひきん」など、いつれへも通ずる歌が、ふくに「なふし金の」なふし菓」なふしころを」など云ひ、なふしら人をおりひ初らん」などのし」ハ、五巻卅二より卅七丁へかけてにいちせるやきめのし」の一つと思へるされど古今のなふしら人を思ひ初らん」も、友則集の一古本には、なにしふ人をとはるなり、猶考べし、近古の俗書どもに、なじらぬ」と云てなにはなり、然ことしの同じさまに誤るも、ゆと件りの「なにし知葉」なにし葉」などの類ぞといふべきか、

○なぞと

△なハ何字の意、ぞハそへて云にて、やぞなども同例なり、されバなぞもなにぞも同く、又いかにぞ誰ぞなど云へるも皆同じとなるべし、その中たもぞハ、色葉奇に、「わかよたれぞつねならむ」と云

へる如くなるハ、あまるハ云へるにて、かゝる処ハすべて「誰か」と云例とおもちるれど、彼色葉奇ハ古き世の物なれバ、それのまゝにて古き詞とすべし、斯意にてよれバ、新古今十一に、たれぞこの三わの檜原も知らなくに心の杉の我を忍ぬる」と詠る、即この例なり、猶古くハ万十四二十「多禮曾許能やの戸おそふるにふなみにわが背をやりていはふ此戸を」などえへり、猶七巻十五すりかべし、

○それ　誰が

△それをたとのみ云へるハをさく云ぬ格なれど、我ハわと云、其ハそとまて、是ハこへ辞なる例によるに、誰もたと云ふてそありぬるべけれど、なほ今よりの思ひしに、古事記に、「みわろにつくや玉垣つき

あゆし多爾加毛余良牟のみやこと」といへる多爾ハ、誰ふなりと傳
四十一ノ卅八ふ釈せるをこれバ、げふと思定られぬかし、因ニ云、為ニと へとを「為ニ」と云へるこも古へ
仏足跡哥など
りええたり、

○孫ぐふ言のいゝふして

△げふ「孫ぐふ言」のなめれど、爰に引る三首の「いゝふして」ハいく
如「何して」と心にかくるのミにて、那ふとまでハいまでもきこゆ
るを、狩顔意と云てよからんをハ、順集にて知へきなり、順集ふ二
月を何む方のところ「いゝにして」花をもつまで花の香を袖につみ
つる清みもおそらき」花を一本にハ「三月をまつみのところ」と影し、
「いゝふして花をつまくし花の香を袖にとめくる清みもこそいへ」と

有て、さて八歟「いゝふして」ハことに顔意のとハきこえざめれど、ハ
顔ハ一本の方宜しかるべく、哥ハ狩板本のまゝよろんと思ふ、さハ「い
ゝふして」ハ何トゾシテの意なり、さて下四ふ出る、「孫ぐふ言のいゝで
云云比格結びにかへりぐ」とある、げふさやうと思ちるくを、此「いく
ふして」ハ結び必ちもん口なるが、口ハざらんの約りなれバ、つまぐ
も同例と云べきにや、後拾春上、「春ふりて花ふきまよふ山里にい
ふしてかる春の来つらん」こハドノヤウニシテなり

○いくてふ辞のつゝひざるにて。云云

△この要論とハいらねど、その序に云ハん、斯くて「ふ」と云ことを
バ、哥なりで文詞ふ用へるハ宜からずとへる、松屋の文のちるべきと

八玉義に依てすや、ふよる時ハ、そのてふようしぬに例あり、玉かつまにハ、無詞あり例けるをを又判るれ
る未論も有、つぎに川べし、されば、愛も其自説にもあらぬやうなり、但し「文のちるべ・そのまゝ唯依りても依る
べからざる歟、中昔の文詞にハ、竹取物語に、かくや姫てふ「なぬもく」
と有をもさべし、古き所にも、者をてへりとよむなど、なほこの
てふ
ろ
ふかうもあれをまれと云など、思ひまらすれべきをとなり、これらのこと
えもんて又別に云へければ、初にてとこれるめく絡り別くとあるる玉緒にこえる
造語のことなれば、聊かるをもいえんとれるまくにかうまて云ふなり、抑このてふ或
いちふなどハ歌詞にて文詞に非るよし「文のちるべ」にこえたるめとハ、玉かつま四十に出
たるを、其処に但しかるくも「あまてふ人の司文」てふ類と定まれる掏有てら おちさ
しても云るハ、なへての例外といへり
然ことさら むくべきまなりかし、

玉緒繰分爾巻終